坊がつるについて

法華院の古記録によればあせび小屋、法華院温泉のある一帯を坊がつるとよんでいました。

これは小屋の背後の台地に古く法華院白水寺の坊があったので、小屋附近の扇状地を坊がつると呼んでいたのです。

これを現在盆地一帯に拡げてよんでいます。このツルという語のついた地名は九州各地にあります。いずれも山から水の押し流した土砂が堆積してできた扇状地をさしています。

坊がつるは周りを九重の山々でかこまれ九州では他に比類のない仙境で、風景と温泉と清水に恵まれたキャンパーの楽園です。終日テントを留守にしていても失せ物一つしない誠に環境のよい別天地です。僅か1時間半の峠越しをする労力が自然に親しもうとする人と俗界を隔離してくれているのです。

この地域には九州の山の名花ミヤマキリシマの大群落はいたる所に見られ、その他コケモモ、イワカガミ、マイヅルソウ、ツクシシャクナゲ、ドウダンツツジ等の高山植物の群落が多く、開花期や秋の紅葉期は非常に美しい別天地です。

美しい自然をそこなわないようにお互いに気をつけてください。

早春のアセビ

野焼後の坊がつる湿原　標高 1,300m

湿原からの小屋と三俣山　標高 1,745m

小屋前のミヤマキリシマ大株と平治岳

玄関から大船山　標高 1,787m を望む

鉾立峠と白口岳　標高 1,700m

あせび小屋について

1 小屋の歩み

あせび小屋は昭和８年に筑紫山岳会のクラブヒュッテとしてこの地に建設されたもので、当時この地にあせびの古木がうっそうと繁っていたので名づけたものです。その小屋は間口三間、奥行二間のバラック造りのささやかなものでした。

昭和13年、長谷部鋭吉氏設計の民家様式をとり入れた現在の小屋の建築にかかりました。僻地に長く滞在して建築に当ったのは、福岡県の田川郡香春町の大工で平野品太郎氏でした。指揮監督は会員福原喜代男氏が入山してあたりました。当時としては多額の費用がかかるため、広く山の愛好者によびかけ、沢山の人達から拠金していただきました。

その結果、昭和15年に漸く落成致しました。完成当時は訪れた人が目を見張る程、豪華なものでした。この影には当時の会員の協力は勿論、北九州市八幡区木屋ノ瀬町の梅本晶雄氏の物心両面の援助、法華院温泉主弘蔵孟夫氏の絶大な協力があった賜でした。

建設当時のあせび小屋

その後戦時を経て、昭和20年の終戦を迎えた時は小屋の屋根は半ばとび散って、風雨にさらされた梁にはキノコが生えている状態でした。法華院主、弘蔵孟夫氏の更なる全面的支援で、昭和21年7月に大修理がなされました。昭和24年に「九州山小屋の会」を結成して、会員の協力で山小屋の維持、管理に当りました。

労力奉仕は勿論、会員はいろいろのアルバイトまでして資金をかせぎ、小屋の改修、露天風呂（観音堂より温泉引湯）の建設、管理人室、資料室等の増築をしてきました。

「故 立石敏雄氏の記録より抜粋」

その後も法華院弘蔵家代々のご好意と、会員の協力で小屋の維持を続けてきました。平成３年9月の台風19号により小屋は壊滅的状態になりましたが、法華院と会員や有志の方々の熱意と支援により見事再建を果たすことが出来ました。また、近年では管理棟も含めた諸々の維持修繕や大改修工事を重ね、今日の状態まで維持保全をすることができています。

2 小屋利用について

小屋は、国立公園の特別地区内にあり、平成17年11月に「くじゅう坊ガツル・タデ原湿原」がラムサール条約に登録されました。

利用は公共性が優先されますので、一定の条件の下に一般の人々にも開放されています。

その目ざす所は、楽しい山小屋の生活ができ、山の自然の美しさを心ゆくまで味わえる、品格のある山小屋にすることにあります。そのため小屋の宿泊は紹介制にしていますが、真に自然を愛され、山小屋使用のマナーを守って下さる方は大いに利用して戴きたいと思います。